東方弱虫録
（1～3総集編）
筆者　カムケン
イラスト　フラットライン

東方弱虫録１〜３ 総集編

カムケン

しっぽ漬

0章　勇気の巻物

「という訳で妖怪の通り魔として恐れられている勇気さんにお越しいただきました」
「うん……その幻想郷縁起というのに載せたいっていうのは分かったんだけど……通り魔っていうのはちょっと嫌だかな」
勇気は稗田阿求という女の子にお話がしたいので来て欲しいと言われ、家に招かれていた。
そして来てみればその話の内容というのが、今までの通り魔としての活躍（？）を聞かせて欲しいとの事だった。
「妖怪の通り魔であれば人間のヒーローではないでしょうか？　その英雄談をお聞かせ願えればと思っています」
阿求は笑顔で言うものの、確実に通り魔として書かれると思いつつ。
「分かりました。良いですよ」
「良かった。断れたらどうしようかと思っていました。墨の準備をしますのでしばらく待っていてくだ

さいね」
そう言って阿求は笑顔で出て行き、畳部屋に勇気を一人残した。
「そうか……幻想郷だから全て情報は全て紙で書かないといけないんだよね」
しばらくしてから阿求が習字道具と巻物を持って戻ってくる。そして片手には零しそうにしながらも、紅茶が入れられたティーカップのお盆を持っていた。
「大丈夫ですか！？」
勇気がお盆を受け取り、それをテーブルに置く。
「それでは……お聞きしましょう勇気さん」
それは少女、稗田阿求のはずだった。けれど勇気にはなぜかこの少女に違和感を感じた。先ほどに会った阿求とはまるで別人のように思えたからだ。まるでそこにいるのは会った事がない得体の知れない少女のように……
「あ、阿求さんですよね？」
「は、はい？　何かおかしいですか？」
「いえ、その……お姉さんとか双子だったりしませんよね」
「稗田阿求は私、一人ですよ。おかしな事を言うのですね。勇気さんは……」
そう言ってクスクスと阿求に笑われた。確かに変な事を聞いているかもしれないけれど。
「そうですよね……」
「何か混乱しているようですね。紅茶でも飲んで落ち着きましょう」

「はい」
　阿求に勧められ、紅茶を飲む。
なかなか良い茶葉を使っているらしく美味しかった。
「美味しいですか？」
「はい、とても美味しい紅茶ですね」
「それは良かったです」
　微笑する阿求にやはり違和感を感じた。
「それで、ボクは何を話したら……」
「それでは勇気さん。横になっていただきますか？　それと服も脱いでいただけますか？」
「横になるのは良いんですけど……服も脱ぐんですか！？」
　阿求に言われた通りに服を脱ぎ、パンツ一枚で畳に寝そべる勇気。
「駄目ですよ勇気さん。下も脱いでいただかないと」
「えっ！？　でも！？」
「大丈夫ですよ。貴方の小さいモノなんて見てもどうしようもないですし」
　そう言って阿求は大胆にもパンツを脱がせ、勇気の身体に巻物をかける。
「一体なにをするつもりなんですか！？」
「勇気さんは私の能力をご存知なかったですか？」
「まさか霊夢や魔理沙みたいに特殊な力があるんですか！？」

小さく華奢な身体からは不思議な力を持っているようにはとても思えない。
「私の能力は筆で書きなぞったモノを全て記憶する能力なんです。つまり勇気さんを書きなぞればその記憶が分かるという訳です」
――そうだっただろうか？　確か霊夢から聞いた話によれば、一度見た物を忘れない程度の能力だと聞いたような気がするのだけれど。
「ちょっと待ってください！？　その筆でボクを書きなぞるんですか！？」
逃げようとするも、女の子とは思えない力で押さえつけられてしまう。それになぜか徐々に力が抜けていくような感覚に陥っていく。
「どうしましたか勇気さん？　もしかして薬が効いてきましたか？」
「まさか紅茶に薬を……」
「うふふっ……それは身体が痺れるお薬なんですよ。これで勇気さんをゆっくり執筆できます」
「そんな……」
「大丈夫ですよ。すぐに終わりますから」
巻物ごしに筆で文字を書き始める阿求。
思ったよりも巻物は薄く、筆の感触が思ったより感じられてくすぐったい。
「やめて……そこは！？」
「そんな身体をくねくねさせないでください……文字が書けませんので」
「そんなこと言っても！？」

阿求の筆は止まらず、文字を次々と書き続けていく。その度に身体はなぞる筆の快感に耐えられず、勇気の身体はくねくねと動く。
「あ……間違えてしまいました……しかたないですね。修正液を使いましょうか」
「……修正液？」
「貴方の外の世界には修正液という文字を消せる道具があるそうですね。それを出してください」
「……そんな物……持ってないよ！？」
「あるじゃないですか。その立派な物があるじゃないですか！？」
巻物を外し、勇気の股間を露にする阿求。
「な、何を言ってるんですか阿求さん？」
「これですよ。ペンのような物です」
阿求が勇気の股間を強く握り閉める。
「あにゅっ！？　そこは！？」
「これを強く押すと出るんですよ」
まるで残りわずかの歯磨き粉のチューブのように強く握り押し出すようにしごく阿求。
液体を促す阿求の手の動作に徐々に快感が伴っていく。
「……やめて……そんな事したら！？」
「出して良いんですよ勇気さん。この筆にいっぱい出してください」
その言葉を聞いた刹那、勇気の身体がビクンと跳ねる。

股間から押し出され、出てきた修正液が太い筆によって全て拭き取られてしまう。
「う……ぐ……」
「ありがとうございます勇気さん。これで文字が消せます」
そう言って再び、勇気の巻物をかけて白い修正液で文字を消していく。
「もう……止めて……」
「まだ止めませんよ……ナズーリンさんにピザにされちゃった話とか面白い話がいっぱいあるじゃないですか」
――なぜそのような事を知っているのだろうか？　紫さんとナズーリン本人しか知らない話なのに……まさか本当に筆でなぞればその人の事が分かるとでも言うのだろうか？
「……どうしてそれを……！？」
筆で胸を何度もなぞられ、身体が何度も跳ねる。
「知ってましたか？　薬のおかげで身体が敏感になってるんですよ……あら、動いたのでまた間違えてしまいました」
「……まさかまた！？」
「はい、また修正液をお借りしますね」
巻物をどかすと再び、股間をぐにぐにと押し出すように修正液を促していく。
「や……めて……もう出ないよ！？」
「いえ、まだたくさん修正液が残っているじゃないですか」

阿求によって股間が押し出され、快感が絶頂に達した。
「うきゅううっ！？」
修正液が飛び出ると、太い筆によってすぐに綺麗に拭き取られてしまう。
「ほら、まだいっぱい出たじゃないですか。次も書かせていただきますね」
こうして巻物ごしに何度も筆をなぞられ、文字を間違える度に修正液を出されていく。
勇気の身体がみるみる衰弱していく。
「もう……止めてよ……」
その言葉に阿求が筆を止める。
「そろそろ打ち止めですかね」
阿求はそう言うと、勇気を巨大な巻物の上に乗せる。
「……そろそろ帰らせてください」
「もうちょっと待ってくださいね。今、仕上げをしますので」
何処から取り出したのか、壷に入ったドロリとした白い液体を勇気の身体にまんべんなくかけていく。
「冷たっ！？　何を……？」
「勇気さんを糊付けにして巻物にします～♪」
「そうなんだ……ええっ！？」
そう言って阿求は刷毛で勇気の身体に糊を塗り伸ばしていく。
そして股間にも糊が塗られ、なぞる刷毛に耐えられずに快感が絶頂に達してしまう。

「ドロドロが……にゅううっ！？」
修正液が飛び出し、糊と一緒に阿求の刷毛によって塗り広げられてしまう。
「あら、まだ出たんですね。でも、そんな所に修正液を出しても意味がありませんよ」
クスリと阿求が笑う。
「ボクを巻物にしてどうするつもりなんですか？」
勇気に棒を抱かせると、慣れた手つきでくるくると巻いていく。
「生きた巻物として稗田家で保管します……あとはこれを縛って……」
勇気は巻かれ、縛られ、本物の巻物のようにされてしまっていた。
「そんなボクはまだ……」
「良いじゃないですか。生きた人間巻物として私に保管された方が幸せじゃないですか？　妖怪を襲われず、誰かに食べられる事も虐げれる事もなく、私にずっとお話を聞かせるだけで良いんですよ」
阿求は勇気にキスをする。
「言っている意味がよく分からないですけど……引き篭って誰かに守られてるだけならボクはこの幻想郷を出たいと思っていません！　それにボクは紫さんと約束したんです！　スペルカード戦で百勝して生きてこの幻想郷に出るって！」
「そうですか……只の弱虫だと思っていたのですが、私の勘違いだったようです」
「やっぱり阿求さんじゃない……君はいったい誰なの？」
「阿求だと思った？　残念でした。私は鵺だよ」

阿求の身体が煙のように消えて、寝癖のようなショートボブの髪に黒い服を着た人間の少女が現れる。
否、それは人間とは違うパーツが部分的に見られた。背中には赤い鎌のような三枚の右翼と青い矢印のような左翼が生え、腕には蛇が巻きついている。
「君は妖怪だったんだね」
「知ったところでお前はここで終わりだがな……寺に持ち帰って海苔巻きにして喰ってやる」
「……そんな……」
「ナズーリンに免じてすぐに喰ったりはしない……ゆっくりと貴方の恐怖を味わって舐めしゃぶり尽くしてやるわ」
「……誰か……」
「無駄よ。薬でまともに声を出せないはずだからね。阿求とかいうのも習字道具の存在が消えて、あたふたしてる頃ね」
「勇気さん、すいません。習字道具が見つからなくて……」
「まさか戻って来ちゃうとはね。運の方もなかなか強いみたいだね。今度は会うときは必ず……」
襖が開くと、鵺の姿が円盤型のＵＦＯとなって阿求の頭上を通り過ぎて出て行ってしまう。
「勇気さん！？　その格好、どうしたんですか！？」
「……助けてください……」
阿求に助けられたものの、鵺に襲われた事を信じてもらえなかった。
その後、阿求には変な目で見られるようになった事は言うまでもない。

一章　弱虫勇気

幻想郷で生きる八雲紫はこう考える。

――人間は最高の食材……

妖怪の好物は人間の絶望と恐怖。もちろんその肉を好んで食べるのだけれど、絶望と恐怖を持った者は特に味が良い。ようするに絶望と恐怖は調味料やスパイスのようなもの。何も下ごしらえしていない肉より塩味やタレに漬け込んだ物の方が格段に味が変わる。

妖怪に比べれば人間は心が弱い。そして力も弱い。知能さえも下手をすれば劣る。幻想郷の外の世界、妖怪が住まない科学という物に頼る人間は特にメンタル部分が弱い傾向がある。だから格別に美味しい食材。幻想郷内では人間を食べる事は禁忌となっているが、外の世界のそれには制限はない。

――いわゆる食材の宝庫……

狙いは絶望に満ちた人間。自殺寸前の者なら美味で、いなくなっても大事にはならない。

居た……美味しそうな絶望の芳香が漂ってくる人間。学校という施設に……

高校生、斉藤勇気は階段に転がっている自分の机と思しき物へとただ、呆然と見つめていた。

散らばり、開かれたノートと教科書には悪口がびっしりと、赤の油性ペンで書かれた文字が羅列されている。その中で特に勇気が目についた文字は弱虫という文字だった。

いつもの事……そう思う事でしか自分を慰める事しかできない。それはしかたない事と……

弱虫と呼ばれるようになったのは小学生の頃からだった。

犬に吠えられた時、地震が起きた時、蹴ったサッカーボールが恐いおじさんの家に入った時、高い場所に上がった時……いつも自分は逃げ出していた。小学校、中学校の時に付けられたあだ名が弱虫だった。そして高校生になった今でもそれは変わらなかった。

教室へ行き、机を持ち上げて席があった場所へと置くと、クラスメイト達から失笑が漏れる。

「弱虫君よ。ちょっくら……お金、貸してくれよ」

ガムをくちゃくちゃとさせながらクラスメイトのモヒカン、田中とリーゼントの吉田がへらへらしながら近づいてきた。

「ごめん……お金は無いから！」

授業のチャイムが鳴るのも、構わず教室から逃げ出していた。
「おい！　待てよ！」
こんな奴らに勝てるはずがない……逃げるしかない。自分にはこれしかできないから。
階段を上がると、屋上のドアに辿り着く。こちらに気づき、階段を上がってくる田中と吉田。
ドアを開け放ち、再び逃げる。もちろんそこに逃げ道など無い事は分かっていたはずなのに……
屋上は背丈が自分より低く、あるのか無いのか分からないフェンス。裏庭が見下ろせるが、四階の高さからはさすがに降りる事は不可能だ。
「ここに居たんだ弱虫君」
田中の声が聞こえて思わず振り向いた拍子で、フェンスに頭をぶつけてしまう。
いつの間にか、田中と吉田との距離が数メートルしかない事に気づいた。
「お金貸してくんねぇ？　一万円ほどさ」
へらへらと笑いながら銀色の指輪をはめた手をこちらに向ける吉田。
「そんなお金持ってないよ！」
「嫌なら、身体で払って貰っても良いんだぜ？」
そう言って田中はポキポキと指を鳴らす。
――逃げるしかない！

それしか頭に無かった。こいつらに殴られるぐらいなら【死んでも良いと思ったぐらいに】
フェンスの下をこらして見ると、四階に飛び移れそうな気がしたけれど……下を見ると、どうしても腰が抜けてしまう。震えが止まらなくなる。
「どうしたの弱虫君？　自殺でもするつもりかなぁ？　まぁ、お前にはそんな度胸すら無いんだろうけどなぁ」
吉田がきゃらきゃらと笑い声を上げる。
「諦めな。誰も助けに来ないぜ」
再度、振り向けば吉田と田中に手が届きそうな位置まで迫っていた。

――こんな名前が付いているのにこいつらに立ち向かう勇気も……飛び降りる覚悟すらないらしい。
「せめて……ボクがここを飛び降りるぐらい勇気があったら……」
ヴゥーン！
独り言のように呟いた時、何処からか虫の羽音に似た響きが耳に届く。
（ここから飛び降りたいの？　それじゃあ、手伝ってあげようかしらね）
そして女性の声と共に背中に悪寒のようなモノが走る。まるで……耳元で誰かが喋ったかのように……
いや……生々しい声は本物のように思えた。温かみのある吐息、女性独特の匂いを感じる限りではまるで本当に喋っているような……！？

「えっ！？」
見回しても吉田と田中以外の人間は誰も見当たらない。じゃあ、さっきの声は一体、誰が喋ったというのだろうか？
「何をきょろきょろしてやがる！」
田中が掴みかかった瞬間だった。
ヴゥーン！
再び、虫の羽音に似た響きが聞こえる。
「おい！　バカ！」
吉田の驚愕の声。慌てる田中。いったいなにが……？
ガシャーン！
何かが崩れるような音が聞こえた。身体は宙に浮く感覚、それに距離も田中と吉田から離れていく。
――これは……落ちている！？
そう思った時にはもう既に遅く、掴む物すら無く、落ちていくのみだった。
これは神様が与えた罰なのだろう……死んでも良いから逃げなきゃいけない理由なんて無かったのに……
落下していく身体は……頭から落ち、潰れたトマトのようになってしまうのだと覚悟した。
死の恐怖があったが、不思議に安心してしまう。もうあいつらに殴られる事もノートに落書きをされて、机を階段から落とされる事も、もう無いのだから……

真上にあった青い空が黒い色へと染まっていく。
不思議に痛みは無く、マットに落ちたような感覚。
「あれ？」
身体を起こしてみる。
動ける？　それどころか、頭に外傷が無ければ、身体の痛みすらなかった。
それに暗い場所なのに自分の服や身体が明かりに照らされたように分かるのはなぜだろうか？
歩いてみると、黒い地面は不安定で、まるでこんにゃくの上に歩いているような感覚で、何だか凄く気持ち悪い。
「命拾いしたわね……それともあのまま死んだ方が良かったのかしら斉藤勇気君」
声のした方向を見ると、目の前には日傘を差した女性が立っていた。西洋人のような洋風な顔立ち、長い髪は金、服は中華風な上着なのに対し、不釣合いなフリルのスカート。それは人のように思えたのだけれど、まるで別の生き物のように感じたのはどうしてだろうか？
なぜだかは分からないが、震えが止まらない。この人からは得体の知れない威圧感と怖気のようなものを感じていた。
「あ、あなたは誰なんですか！？　それに何でボクの名前を知っているんですか！？」
「私は八雲紫、妖怪よ。あなたをずっと見ていたの。だからあなたの名前も分かる……そしてあなたが弱虫と呼ばれている事も……小学生から寝小便を垂れて、グズでノロマでテストで０点を取る事も私は知っているわよ」

「妖怪？　それは猫型ロボットの話ですか！？　弱虫なのはそうかもしれないですけど、グズでノロマでテストで０点は取りませんよボク！」
ふざけているのだろうか？　恐らくは誰が見ても一目瞭然のような震え方をしているのだから、リラックスさせようとしているのかもしれないのだけれど、それでも威圧感や怖気のようなものは変わらない。
「あら、そうなの？　同じだと思っていたわ」
紫という女性はゆっくりと歩む寄ってくる。
後退りして尻餅をつく。それほどのまでにこの女性が恐く感じられる。殺気とは違う何かが、襲っている。
「ここは何処なんですか！？　ボクを助けたのは感謝します……だけどもう学校に戻らないと、行けないので……ボクを元の場所に戻してください！」
「残念だけれど、返す事はできないわね。だって……貴方は妖怪の食料だもの」
「妖怪？　食料？　どういう意味ですか！？　からかうのは止めてください。ボク……本当に怒りますよ！」
立ち上がり、そう言ってみたものの、声が震えて威圧させる事すらできない。
「あら、貴方は気づいているのではなくて？　私が人間では無いという事を……じゃなければ、私を見て震える事なんてないはずですもの」
空間の切れ目が発生し、紫がそこに手を伸ばす。そこから取り出した扇を口元に当て、微笑む紫。

さっきのは手品か……何かだろうか？
「そ、そんなのウソです！？」
「恐らくは貴方が感じているのは妖気、恐らく血筋は巫女か徳の高いお坊さんだったのかもしれないわね。霊力もそれなりにあって、恐怖を感じやすい貴方は高級食材になりそうね」
「食材って！？　な、何なんですか！？」
嫌な予感が過ぎる。
「つまりはね。貴方には少なからず自殺願望があった……自殺は他者を殺す事より重罪なのです。そういった者を私達、妖怪は食べてしまう」
「た、食べる！？　へ、変な冗談は止めてください！？」
「冗談もヘチマも無いのよ……残念だけど、あなたは食料として提供される」
紫が閉じた扇を地面に向けた瞬間……
ヴゥーン！
虫の羽音に似た響きが何処からか聞こえた。
そしてすぐにぬるりとした何かが足に絡みつくのを感じた。
「なっ！？　なにっ！？」
自分の足下の隙間から出たのは得体の知れない生き物の無数の触手だった。
「恐怖や絶望以外にも人間を美味しくする方法があるのよ。知ってたかしら？」
触手はぬるぬると絡みつき、パンツの中へと入り込んでくる。

「はにゅっ！？」
「それは快感……それに恐怖と絶望を与えれば、至高の食材となるのよ」
そしてそれは股間を擦るように締め上げ、胴、手、首といった箇所を蹂躙していく。
「こんな事したらで……出ちゃいます！？」
ナメクジのように這っていく触手に耐えられず、思わず身悶えてしまう。そんな自分の反応を紫は面白がっているかのように見ているのみだ。
「あら？　何が出ちゃうのかしら？」
そう言って微笑を浮かべながら触手の隙間に手を突っ込み、股間を触る。
そうすると、ぬるぬるする紫の手が快感を増していく。
「や……止めてください！？」
「どうして？」
紫は止めることなく、股間を撫でるように触り続け、ぬちゃぬちゃと不快な音を立てる。
「じゃないと本当に……はううっ！？」
構わず手の動きを速める紫。ぬちゃぬちゃと撫でられ続け、快感が絶頂に達していく。
「良いわ。離してあげる。その代わり……」
手を離す紫は手に付いたぬるぬるした液体を舐める。
「何ですか？」
「こう言えば助けてあげる。この世にはもう未練はありません。解放してくださいと……貴方の本音の

言葉をそのまま言えば良いのです」
本当にそれは凄く簡単に言える言葉のような気がした。弱虫と呼ばれる自分にとっても……
「この世に未練は……あります」
「あら？　助かりたくないの？」
「助かりたいです……だけどこの世に未練は無いなんて言ったら、今まで生きてきた事がまるでバカみたいじゃないですか……確かにボクは絶望していました。だけど、生きていたいと願っていたんです」
扇を閉じたり開いたりを繰り返し、不思議そうな顔をする紫。
「それこそバカなのではなくて？　その発言で例え妖怪の食料になったとしても？」
「はい……強く生きていきたいっていうのがボクの夢だったんです。生きていつかあいつらを見返してやりたかったんです」
「死を恐れず、意地を通すという訳ね……うふふ。どうやら只の弱虫ではなかったみたいね」
紫が扇を振り下ろすと、触手は床下の隙間から引き込んでいく。
「えっ？　どうして？」
「あなたに三つの選択肢を与えましょう。一つは死を選び、妖怪の食材になるか？　二つは力を得て、私の式となるか？　三つは何もかも忘れ、元の世界へ帰るか？」
また簡単な答えのような気がした。
「ボクなら三つ目の選択肢を選びます」
「それは貴方が決める事ではないわ。運命が決めてくれるでしょう……貴方は幻想郷で生きて、死を願

うか？　力を乞うか？　友を忘れて帰りたいと願うか？」
「それって……どういう意味ですか？」
「まずはあなたを守る力を与えましょう」
紫が指を鳴らすと、黒い影の隙間から小さな箱が落ちる。
「これは？」
小さな箱には不可解な文字が刻み込まれていた。箱をスライドさせると、数十枚のカードが収納されていた。
「それはスペルカード。幻想郷では異変を起こす妖怪と戦う為に巫女が考案した決闘ルールに使うカードです。使い方はおいおい分かるでしょう」
「幻想郷？　ボクにこれを渡してどうしろと？」
嫌な予感が過ぎる。
「幻想郷でスペルカード戦を行い、百勝を勝ち続ければ幻想郷に帰してあげるかもね」
「百勝！？　そんなの無理です！？」
それは無謀な試練のように思えた。それによく分からないけれど、スペルカード戦というのは只のカードゲームではないような気がした。
「同じ相手と戦っても、もちろんそれはカウントされないわ」
「幻想郷とかいう場所に行って、訳の分からないゲームで勝てと言うんですか！？　そんなの無理に決まってます！」

思わず涙がこみ上げてくる。この人は自分に勝てないと分かっていて、ゲームを持ちかけているんだ。そして妖怪の餌になるか、下僕になれと……

「無理ではありません。私の知る範囲では人間でそれを達成してるのは四人、無理ではないでしょう？」

「で、でも！？」

「これはあなたにとっても良い薬です。毒になるかは薬になるかはあなた次第。それにどのみちあなたはこのまま帰しても、自殺してしまうでしょう？」

「そ、そんな勝手に！？」

「そして契約……」

鈍い痛みが走る。

「痛っ！？」

気づくと、紫は自分の額に爪を突きつけていた。

そうして紫は爪で額に文字を書くように動かす

「もし、私に断りも無しに元の世界に戻った瞬間、貴方の頭は爆ぜることになる」

満面な笑みでさらりと恐い発言をする紫。

「そ……そんな……」

「お行きなさい幻想郷へ！」

ヴゥーン！
虫の羽音の似た響きがまた何処から聞こえた。
そして……

また勇気は落ちていた。
「ええええっ！？」
そして気づけば、暗い風景から一気に明るい風景となっていた。今度はたいした高さではないのが幸いか……いや、打ち所によっては……
前のめりに落ちている……石畳と紅白の模様が顔面に迫る。
「ぎゃあっ！？」
落ちた瞬間、柔らかい感触と……女の子のか細い声が聞こえたような……
痛くない？　何かがクッションになって怪我をせずにすんだらしい。
「何だろう？　これは……？」
クッションとなった物は温かみがあり、何か柔らかい。
むにゅっ！？
手につくと、いっそう柔らかい物に触れる。
「はぅっ！？」

それに気のせいか、女の子の声が……
柔らかい感触と声が気になり、何度か揉んでみる。
むにゅっ！？　むにゅっ！？
「はぅぅっ！？」
やっぱり気のせいじゃない……という事はこれは……！？

顔を上げてみると、赤面して呻く巫女装束の衣装に身を包む女の子がそこに居た。
「ご、ごめんなさい！？」
「あんた……ねぇ！　人の上に落ちてきて、胸を揉むとは良い度胸ね！」
女の子は勇気を乱暴に押し退け、立ち上がる。
「ほ、本当にごめん！　まさか人の上に落とされるとは思ってなくて！？」
「うわ……服がぬるぬるじゃないの！？」
巫女装束の女の子、嫌そうに顔をしかめる。
見た目からだけれど、歳は自分とそれほど変わらないように思える。
「え～と……」
「あんた見ない顔ね……服装からすると、外の世界の人間のようだけど」
服装と言われて気づいたが、彼女の身に纏っている物は特に変わっていた。よく見ると、ロングヘアーの髪には大きな赤いリボン、巫女装束には袖が無く、白色の袖を別に括りつけ、肩と腋の部分を露出させている。
一言で言えば、コスプレのような服装だ。
「外の世界？　それはそう言う設定のイベントか何かかな？」
首を傾げる勇気に巫女装束の女の子は不思議そうな顔をする。
「最近じゃ幻想郷を知らない人間というのも珍しいわね……妙にこっちの事に詳しかったり、私の名前を知っていたり、無闇にやたらと写真を撮りたがったり、抱きついてきたり……でも、胸を触ったのは

あんたが初めてかもね」
ジト目で見る巫女装束の女の子。
「ご、ごめんなさい！？　本当に悪気があってやった訳じゃ！？」
頭を下げる勇気に巫女装束の女の子は溜息をつく。
「別にいいわよ……どうせまた紫の仕業でしょ？」
「紫さんとは知り合いなの？」
「知り合いというより……腐れ縁ね」
「じゃあ、君も妖怪なの？」
歩む寄る女の子に思わず身構えてしまう。この女の子もあの紫と同じような妖怪だったら、何をされるか分からない。
「失礼ね。これでもれっきとした人間よ。私は博麗霊夢、この博麗神社の巫女よ」
「神社の巫女？　君が？」
霊夢に言われて周りを見回して気づいた。周りは石畳、鳥居、奥には神社がある。
「じゃあ、何だと思ってたのよ？」
「え～と……」
睨むように見る霊夢にコスプレイヤーだと思っていたとは言えず……
「まあ、良いわ。外の世界に帰してあげるからこっちへ来なさい」
明るく手を差し伸べる霊夢……思わず手をとりそうになる……元の世界に戻れば死んでしまうという

のに……

「駄目なんだよ。ここがその幻想郷という場所なら……ボクは出る事ができないんだ」

うつむく勇気に首を傾げる霊夢。

「どういうことよ？」